

巴伊國名所圖會

後編

六之
日高郡



紀伊名所圖會後編卷之六

目錄

日高川子圖
岩内王子社
山田莊
塩屋浦并圖
權現磯
上野莊
山臥塚并山田圖
阿古根の浦
佛井戸并圖
印南驛并圖
土橋

日高潮
春日社
紀道明神社
塩屋王子祠
輕島
灘
壁川橋
古錢
清姫腰掛石
印定寺
御所平

岩内莊
熊野權現社
蟹田山
王子川
産物沖牡蠣
後戸
壁崎
上野
印南莊
正八幡宮
富王子祠

石淵郷
聖德王子社并圖
熊野川
富島
武塔天神社并圖
清姫草履塚
野島
上野王子祠
津井王子祠
印南川
大歳明神社



切目莊 并全圖古
 大塔宮社 并御
 切尾湊 并御
 百王子塚 并御
 川又觀音社 并圖
 中山 并圖
 結松 并圖
 岩代原 并圖
 岩代井 并圖
 南部郷 并圖
 南部峠 并圖
 名石 并圖
 南部川 并圖
 切目五躰王子社 并全圖古
 御所屋敷 并全圖古
 切目川 并全圖古
 眞妻明神社 并全圖古
 岩代王子祠 并全圖古
 中山王子祠 并全圖古
 岩代山 并全圖古
 岩代王子祠 并全圖古
 沖見茶屋 并全圖古
 片倉峠 并全圖古
 千里濱 并全圖古
 目津崎 并全圖古
 南部驛 并全圖古
 熊野懷紙 并全圖古
 玉那木淵 并全圖古
 切目畝 并全圖古
 樺川 并全圖古
 岩代莊 并全圖古
 岩代尾上 并全圖古
 岩代濱 并全圖古
 八幡宮 并全圖古
 餅 并全圖古
 千里王子祠 并全圖古
 千尋濱 并全圖古
 勝專寺 并全圖古
 那木 并全圖古
 切目宿 并全圖古
 新八幡宮 并全圖古
 光明寺 并全圖古
 盤代岡 并全圖古
 岩代野 并全圖古
 岩代岸 并全圖古
 南部莊 并全圖古
 引木坂 并全圖古
 産物珊瑚砂 并全圖古
 御所原 并全圖古
 三鍋王子祠 并全圖古

安養寺 并古
 超立寺 并古
 瓜溪 并古
 阿和惣大明神 并古
 鹿島 并古
 三名部浦 并古
 一宮権現社 并古
 産物盆石 并古
 天寶明神社 并古
 産物海馬 并古
 異事 并古
 祇園御靈宮 并古
 南部川郷 并古
 笹峠 并古
 鹿嶋明神社 并古
 道祖神の事 并古
 野邊氏城跡 并古
 轟の龍 并古
 埴田梅林 并古

居名之湖是利也他湖の字塔ミナトと洲あり万葉集注載小引る河波風之記の中
湖具湖も亦同例あり又万葉集小潮見明且石之潮潮葦又潮核延昔皆湖を混り
て潮子作又字鏡集小潮をミナトと洲る
をわし小中世後ア用るしるらん
靈異記云

紀伊國日守郡の瀬子紀勢侶船長とつゝ人引りけり烟波
結んで魚を捕るるの儀業と須同必安帝那今此を吉備郡
此人紀伊馬貴と海部於淡中郡の人中尾連紀父麻呂と二
人百侶船長小傭賃とて年便と交くる小引人百侶の
うちれく二人を若行馳使志て烟を引くせ魚捕らせけ
り然る小室飛去年六月廿日天卒に風さちち中入たち
隙志とつて湊く大なる海川と下ると輕木流出しうい人
の此二人を若行志く流る本をぬらぬれれば二人と
いふ事流るるを掬子編とともれうちまアて流ると次
るにあ勢さげしとて魚獲りて後とけ詭を湊
をささく海小入しと各一本小室とて湊流しとて

二人を如何にもせんよとて唯南無を奉り英雅解脱せ
しめり尺迦年尼佛と稱へて夫叫びて息さるる
あや何ぞけむ祖父麻呂の六日と稱く淡路小南西田町燈
浦此燈焼く人の怪小僅くよとて泊り馬貴を後と日小
同ふしとて泊りてからとて魚を獲るる其御人等こ
も流るるを由をいひしとの状を知らずて懸出さひつ
尚團司も申されば團司も忠みと稱儀給ひてるる
あやの耐祖父麻呂歎しつゝやとて殺生とてし人引
ていして苦哉交るるを重なりとて日守小意らば彼又馳使
志く殺生の業を止ざらんとして小苗とてし其小の團
分寺此僧小枝ひつゝ馬貴を二月を絶くこと御子海
東アし小妻子これをえとて面交さるるを絶く
しとてしつゝやとて海小入て溺死せしときとてし

岩内荘

旧河川の南界あり
まが河村をまが

石淵郷

和名柳小出今廢して河を以て日河川の
南界小里内村ありて定ふちの地なり

岩内王子祠

岩内村ありて今也志波王子といひ地河流
岩内王子此社地蔵没して及妻小社をくり建川

春日社 旧村小川、境内産くして古木林田も

春日社 旧村小川、境内産くして古木林田も

熊野權現社

熊野村ありて今も
ありて今も

當社々々熊野大神を祀りて境内に多く社殿社殿の不傳分性

子古八十二社ありて後世に社社殿の合傳祀性とてあり

弟小川上庄の大山権現々社殿の危傳瘡性守護の神あり

有徳大君社殿の藩傳不性味性々々社殿の南傳社性へ社殿の御傳立性願性ありて神田各十

二石づつを寄附社殿の銘傳あり性

祭日神樂歌社殿のあり傳今性も性あり性

ゆるぎ車馬とせり社殿のゆるぎ子の増れ傳る性地性か性と性

東山々々社殿の此傳者性ふ性お性わ性れ性出性ず性、地性が性れ性り性て性お性よ性く性

若らちや社殿のれ傳り性さ性よ性、美性山性や性大性崎性松性ふ性と性る性れ性い性て性

ふるさつ、海ふるさつ大里小里もさうさへ
日れ山うらを掛くも次オ、掛くも日次第級とさ
て今そちあつた次

智徳太子社 下野口村於海林の中あり

山田丸

岩内丸の十流小川を流るる元木古木のほろ小田川南小移りて名庄の一村に別れて川乃りて

紀道神社 村より川の傍にありて名庄浦小流に當りて川上名二百餘

村小遷りて元木古木のほろ小田川南小移りて名庄の一村に別れて川乃りて

蟹田山

天田十塩屋二村の古小川に神幸也内王子を祀りて山を越て陸を王

熊野川

川は旧の所流るる系久いそんくさき古流の眺や

塩屋浦

子川を流るる南小二村小なる元木古木のほろ小田川南小移りて名庄の一村に別れて川乃りて

夫木抄

沖つ風塩屋の浦を流るる小のわつてもや夕煙くぬ 第三のみ

奇批名寄 あつた心塩屋の里に流るる系とさう掛やあつた 中務親王尊

○塩屋王子祠

小塩屋不考して王子川の傍小祠に人英人王子と云ふも後年

柳幸記云

十一日雨降申後聊休入夜月朧々也遅明出宿野 不知 超山

参塩屋王子 此邊又勝 地有秘 次入晝宿小食

あつた心塩屋の里に流るる系とさう掛やあつた 後二條内大臣

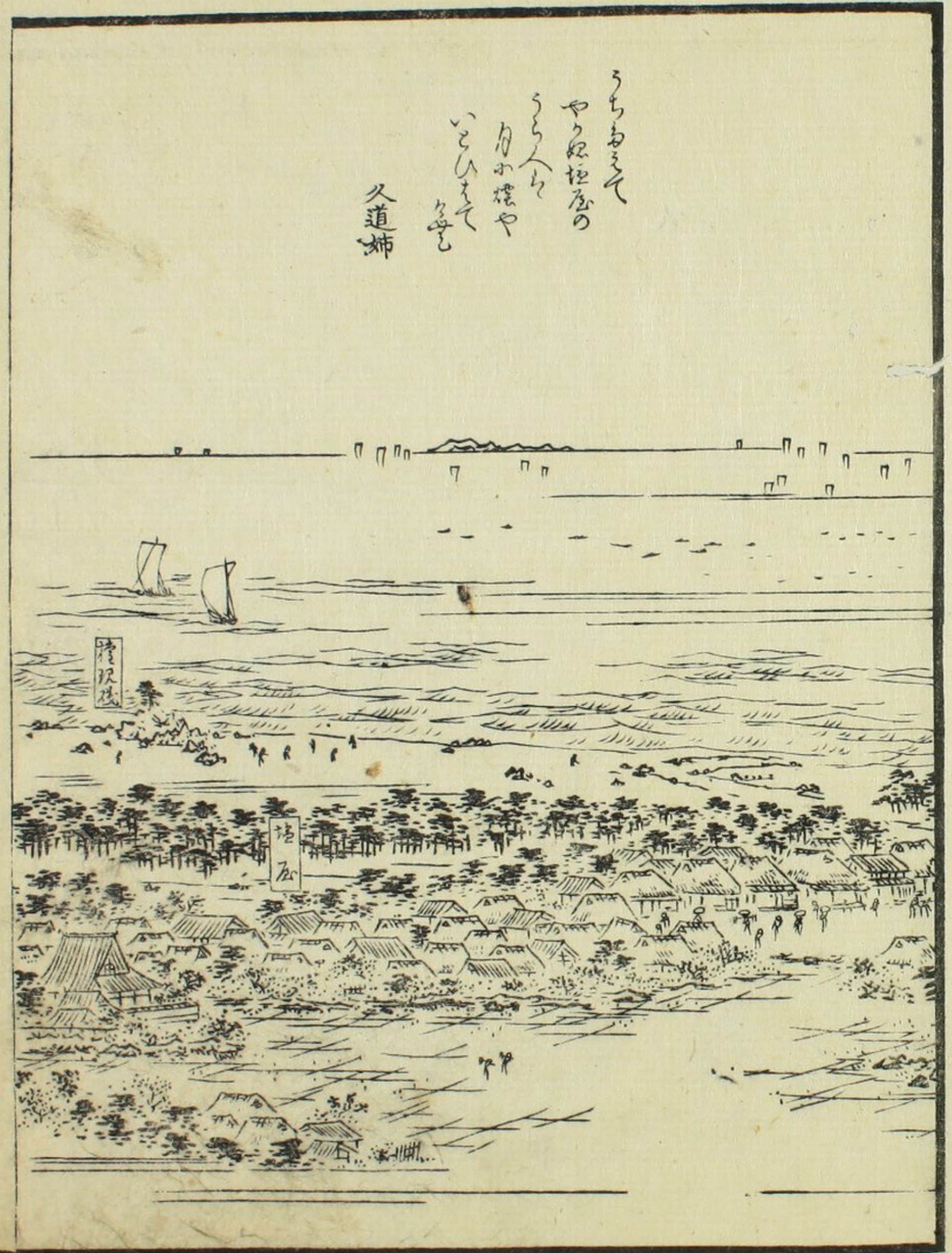
新古今集

塩屋村在日高川之海口昔時煮鹽為業因名焉今村分南

鹽屋王子祠前碑 仁井田好古

鹽屋村在日高川之海口昔時煮鹽為業因名焉今村分南

うらもきて
 やうね屋の
 うらもきて
 月おぼや
 いとひまて
 久道姉



塩屋浦
 塩屋王子社
 権現

自然春登集
 木田わらわ
 をこまて
 去の海
 宗祇

帆の後の
 夕日こやせ
 海の秋
 亦叙



記回編六八



塩屋浦古圖 乃起孫あり



北、其在北者山岡東來西北臨日高川山岡登纔數十磴上
平坦而樹木蒼鬱神廟在焉稱鹽屋王子一稱美人王子美
人稱古無所見不知其所起祠在山岡可以遠眺望故 聖
駕幸於熊野每為駐驛之處 白河法皇之幸公卿賦和歌
於祠前建仁元年 後鳥羽帝之幸亦駐驛於此御幸記所
謂此處亦勝地是也元弘之亂大塔王避難遁于熊野亦投
宿于此蓋 二帝駐驛之後屋宇猶存也今也屋宇皆廢而
草樹蒙密之中遺址獨在焉故土人呼曰御所芝其地形東
連山巒西臨海畔淡阿諸山隱々乎蒼波杳渺之中其北則
衆嶺回擁如半環蒼翠凌虛遷迤西走其間一大海灣若開
鏡面此古之地形也數百年之久砂土填海川流亦移海灣
變而沃野數里村落鱗集田疇區分閭廓遠大曉曉於雲烟
之中翠松一黛彌漫乎海畔數里之間山容水態四時極其

濃媚花晨月夕千歲同其奇觀誠可謂一郡絕境矣嗟乎人
之居世老幼異思貴賤分趣觀物之情固不能同登茲岡也
二帝一王游豫踟躕之蹤依然猶存焉則豈得無意哉將追
聖駕欣賞之跡縱其心目翬飛神怡朗誦微吟樂而忘歸邪
將弟帝子於遺跡欽其英風氣烈流涕歔歔猶有餘慨邪又
將達觀古今一視萬類來滄之變不入於心悲觀之跡不繫
於懷于々焉洋々焉以遊思於物表耶樹碑勒文後之觀者
其有所擇焉

天保四年癸巳九月

○王子川

王子祠の南小橋を架以以川源と成林川よ
り流れ出て熱海川と合し一日も川を流る

富鴻

人車記云

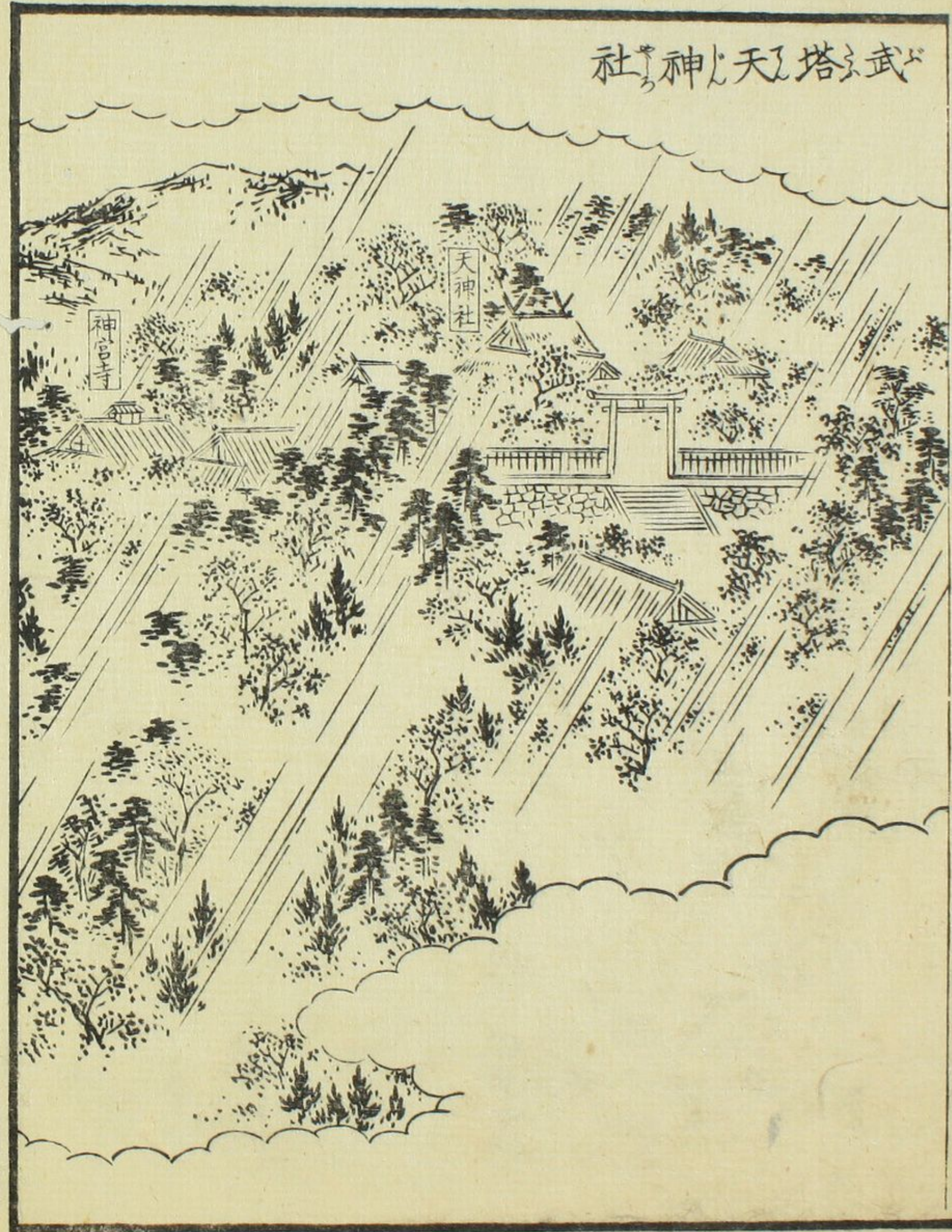
仁平二年四月十四日

畧

或人云今度御熊野詣每事不吉畧
又自御下向道御先達實賢法橋病腦富島御宿以後万死不



武塔天神社



神宮寺

覺雖一院一所不奉送謹應留途中了

權現磯 海浜をり

此地鹿背涼よりの日の碑ふままでの連山海面小横
日る川の海口と尾崎と紙左右小擁一經流中央小海
くく海破の裏段小くくくくくくくくくくくくくくくく
書とついで慈光神宮の跡とつひ傳ふ描ふ小建唐の文
とあり其因を今天回と書く一龜石の辺頂まで海口
龜形形りる裏段あり小くくくくくくくくくくくくくくくく
富流の名々知るもれるとついで其田龜石小横せる地小
ゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くく富流所宿も亦此地の名ありやらん

輕嶋 日浦尾崎より海上二十二丁あり

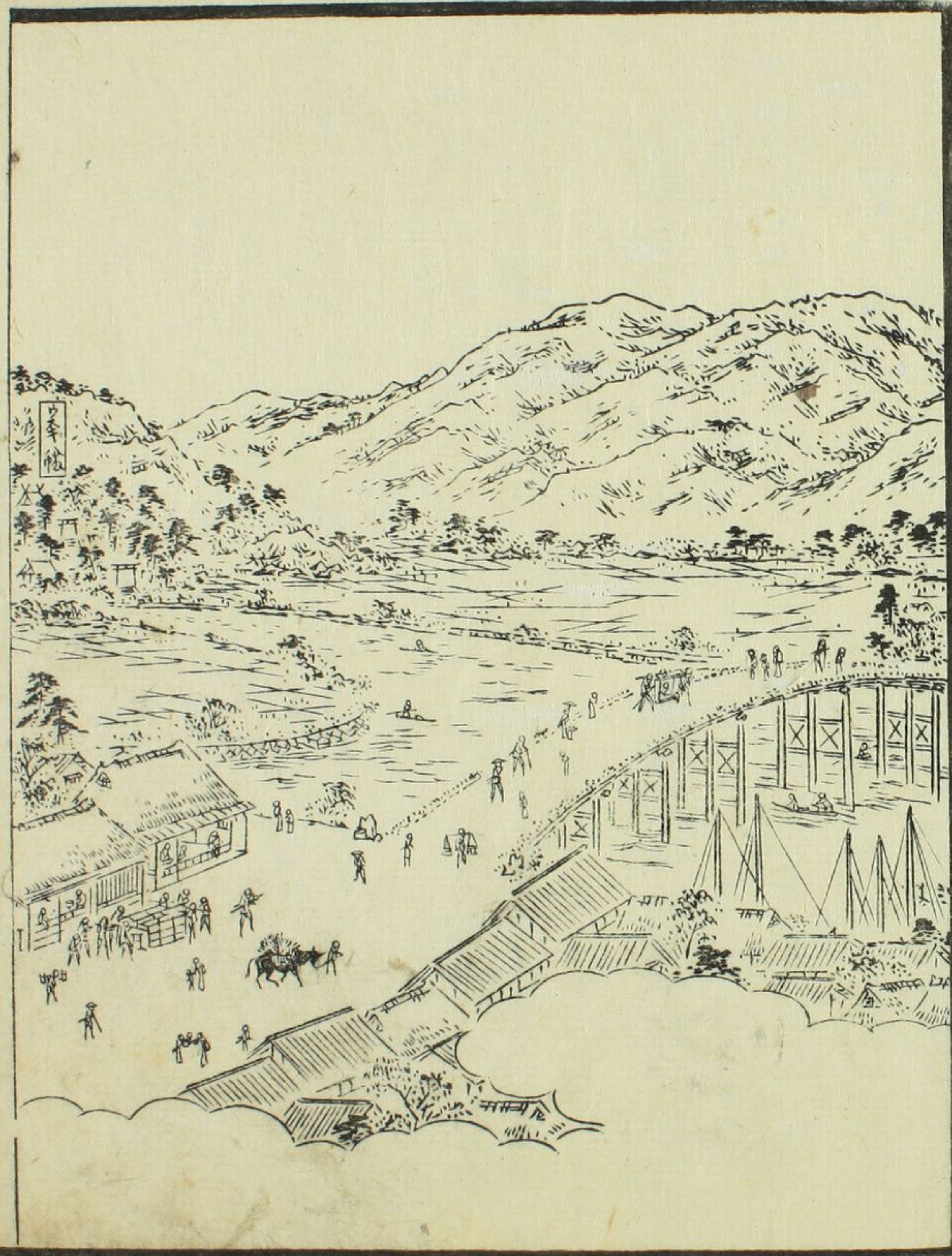
産物 大なる穀ふりて草木生ぜし

武塔天神社 日村ありて七ヶ村の産物と云ふ

上野 山田庄の南あり

灘 南庄尾浦より南に於て上野村井井

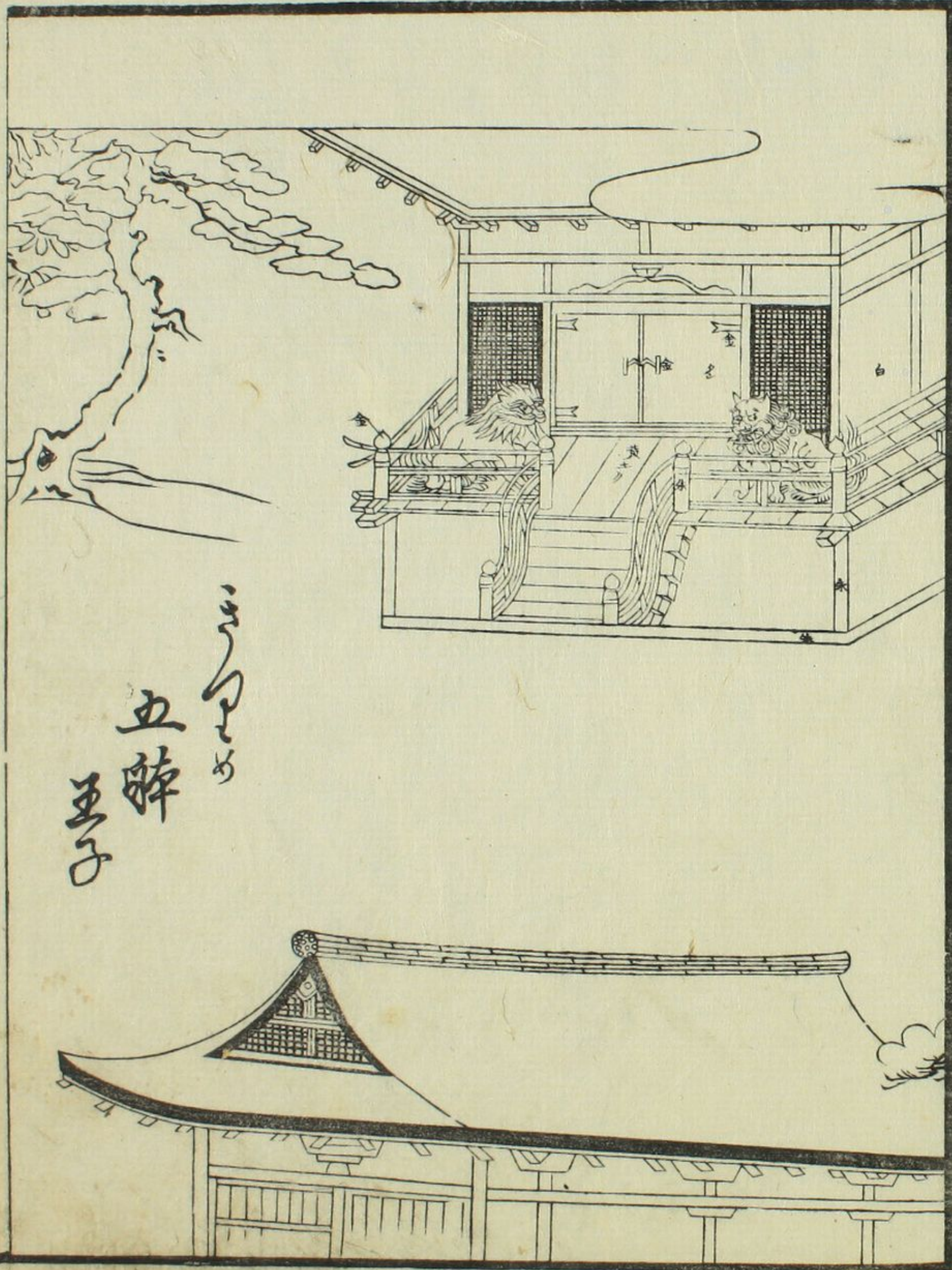
灘 のに村をさして近所の灘とつひ
切目 此の灘の海をさして
この灘 の海をさして
乃頃 の頃



印南驛
の橋造
の園







五
 王子
 五
 王子



切目王子
 社古圖
 道成寺
 縁起中
 あり

崇つて懸て出家して少納之入乃任西と云々

然形道間王子祠（のりまのうらみ）のまゝにいつとも当社古より

こぞ小甚名をくつえしとて祀り神々又倭王子と稱

或は覆文ある（八俣）中古々社殿も壯麗なりとて小文正のを築

小罹りて神宝をも焼そし其後或比良尾ありて再興

とて寛文二年官より御帳も御馬等とありて銘

ひ神殿に修飾をも加へり又柳の本と楓の本とて

内子樹をせ移して今小第とて當社小柳本と極

させりひしと古より然形治小の女當社の柳本と

かざしとて此例の廢しとて興しありる意あり

然形治小柳の本を挿しとて山城國の稻荷治小

松本系とて類の古例ありて神皇の託りあり

子故小の系誠以て神符と次とて其始を考ふ

ろ小長寛勅文小引これ縁起小大神當小あり地の
玉那本此例といふ小始りて次とて其地那本乃
本多き川邊なりとて玉那本此例とて名つてたれ
り多し一して其神靈誠當社小祀りて玉那本と電
て神の降り多し中縁小より其本此神符と次
子よりとてはれりなりとて遷坐しとて之山
等小もい本此多しとて推し知るべし

寄題切目王子宫

祇源瑜

蓬萊之山海中時六鼈負負潮噬趾王府銀臺知多少五雲

玲瓏金霞紫切目神殿第幾宮不老貝闕何處起貝闕窈窕

屹雙桓碧磴青蘿水蔥寒（水蔥樹名）療渴梅泉天淵漿萬古

宝燈金鷲丹南山往々金丹穴傳是羣仙所窟盤紺宇銀月

秋如水芝蓋颺輪駕六鸞帝子降來山之阿風颺々兮珮珊

南海集

浸さして守書くこと量傷まざらんや言登る事しこ小
 ぬり神中神しくは君蓋そ天くうはらんそ小侍
 を地小投て一公小泳を致してそ新申させしむる
 丹波之二の御威意むらうらうらんと神意も晴小計
 られらる終叔の終叔小御新承るくれば法統をせげ
 て枕くして暫御目睡るけ家御夢小繁結ひく事子
 一人事く然聖之山の言も尚も人の心不和あして大義
 承るくこと是より十津河の方へ法統を以て時乃玉
 らん誠法統のくくあ不権現より案内者小付け逢ら
 せられくへは法乃権現はくくと法統をくれば御夢ハ別
 見小あり是権現の言告るりとのあゆくも名されを
 ば末の小津悦の奉幣法捧げむく十津川と初てそ分け
 入らせ終ひけ家其乃の程之十里れる小ハ終て人里もる

うらけく云く教日れる初る冷秘を録させ多ハ法乃を
 多外そそ流る汗と水の如く法乃を飲け換して多録
 皆血小海れり法統の人くも皆其乃法石小水と皆肌疲
 せそくもく教も歩ゆさくもくも御橋を推し法乃
 を携えそそ路の程十二日小十津川へそそせしむれと
 何と

按ずれば文正中大平記小宮ハ鹿角して大峰御をれ終小池の路と上
 初法輪の敷とくく十津河小若あり云くことつて秘記の略法輪の敷ハ御
 初ら法乃化切目と十津川中々の法次事くくもれる多く人ハ口
 碑も匿くあして法乃を法乃と唱へて不迂回あして便利の地とくく法乃切目
 を法乃といひ傳ふる小其実小進くれば今度小録以親王切目とそ子れ多乃皆
 を法乃とせりるより南此方終聖と熱うせり人事と止ありひて及と東の
 あり終て東より十津川へはさるるにせりるべし山地法乃御井末丹生
 川の田村と唐て大和園十津川上湯川村と至りて法乃山法乃とそく山をの
 地とそくせりる是法乃谷中此法乃谷にあり然して其路法乃法乃御井末丹生
 今も法乃馬共く通せり人法乃と移りれを六百餘年其乃の法乃ハ其乃大
 平記に記するがやぐみそ推後法乃法乃と法乃とそく法乃とそく法乃の
 所上りてやおれ法乃法乃切目とそくせりるべし十二月晦日なり法乃ハ
 平月れすくけ小春一峰と里人くくひて法乃法乃とそく法乃の法乃

今やておとせむいふれと里人等あはれふ外とのそひ梅アてまうてさるもれ
梅ひ目ら憐れとて遂ふこは事と止めしつへてあやうの夜ふる
まづもはるれ内て十津川たて憐れる樹てつる元日八重食はつひつら

渡切目川拜大塔王祠

野呂隆訓

崎嶇幸脱虎狼唇從此折東入十津偶失一枝安鳳翼更尋
深壑隱龍鱗天心假手廻西日星氣因君拱北辰只歎寒流
乾欲絕誰薦祠下淺灣瀨

御所屋敷

切目王子の社地の良小つて後鳥羽院慈覺寺幸小正治二年十二月二日

御幸記

参初了王子入宿野寂校少海人平屋也御所前也但國占宛云小時御
幸入御步晚景又有題即書之持参戌時許如例被召入讀上
了退出曾無極品羈中聞波野徑月明

うらもあねとふや小浪のうねのまろしと松の風さるるも

於此宿所塩垢離カク眺望海非甚雨者可有興所也病氣不

快寒風吹枕

切目宿今れ西野地村

平治物語云

平治元年十二月十日れ庵と波羅よりの立し子馬
切目れ宿あり追付しり器大貳法盛ら然れと系治と
不遂し切目の右より馳上るけり云按しりて是後抄云
回迎たねの事といふ事云小は事と云して
文田をと教しりて

憲法傳信記野山入舎記云

十三日終夜雨降今朝雨脚止了次著切目宿南望雲海沉沉
而浸月前開月浦皎々了如秋有興有感柱記云了

望遠蒼波萬里雲心窺旅館一霄夢

水崎久道

詠二首和詩

遠山落葉

あきればはきはきいづるや
とみはさかきも雲が
こぼちのやうに

海邊晩望

うらぬにがみの秋まて
雲をきいてけし月の
けうさく心し

詠遠山落葉傳歌

右を傳大將通訳

こわのやうにせらふ
みちこちわきてふ
おいらはさかきも
こまりの

海邊晩望

あつぬさけをちえ
ふのふちのまきは
いしをあらるる
伊勢かふ

詠二首和詩

春宮亮藤原範光

遠山落葉

あきつゝ心あつて
のいよとてあつて
るよのさうなま

海邊晩望

あつぬさけをちえ
ふのふちのまきは
いしをあらるる
伊勢かふ

詠二首和詩

春宮亮藤原範光

遠山落葉

あきつゝ心あつて
のいよとてあつて
るよのさうなま

海邊晩望

あつぬさけをちえ
ふのふちのまきは
いしをあらるる
伊勢かふ

下は舟
あつぬさ
けをちえ
ふのふち
のまきは
いしを
あらるる
伊勢かふ

冬自於切目王子詠二首和歌

二位上流行藤原朝家隆上

幸山落葉

あふらふとくまきしつら
まらふとくまきしつら
いづつらとくまきしつら

海邊眺望

いづつらとくまきしつら
まらふとくまきしつら
いづつらとくまきしつら

詠遠山落葉和歌

侍從藤原雅經

いづつらとくまきしつら
まらふとくまきしつら
いづつらとくまきしつら

海邊眺望

いづつらとくまきしつら
まらふとくまきしつら
いづつらとくまきしつら

詠二首和歌

能中源具親

幸山落葉

いづつらとくまきしつら
まらふとくまきしつら
いづつらとくまきしつら

海邊眺望

いづつらとくまきしつら
まらふとくまきしつら
いづつらとくまきしつら

詠二首和歌

沙弥宗蓮

幸山落葉

いづつらとくまきしつら
まらふとくまきしつら
いづつらとくまきしつら

海邊眺望

いづつらとくまきしつら
まらふとくまきしつら
いづつらとくまきしつら

詠二首和歌

散位藤原隆實上

遠山落葉

やまのゆるあゝもあや
いむくももさちりり
あまのまきれは

海邊眺望

わさねささるるんら
あそれ志ま

詠二首和歌

散位源家長

遠山落葉

もみらるやまをら
あまのまきれは

海邊眺望

あそれ志ま
あまのまきれは

詠二首和歌

右馬の六尉孝景上

遠山落葉

あまのまきれは
あそれ志ま

海邊眺望

あまのまきれは
あそれ志ま

此懐中十一枚

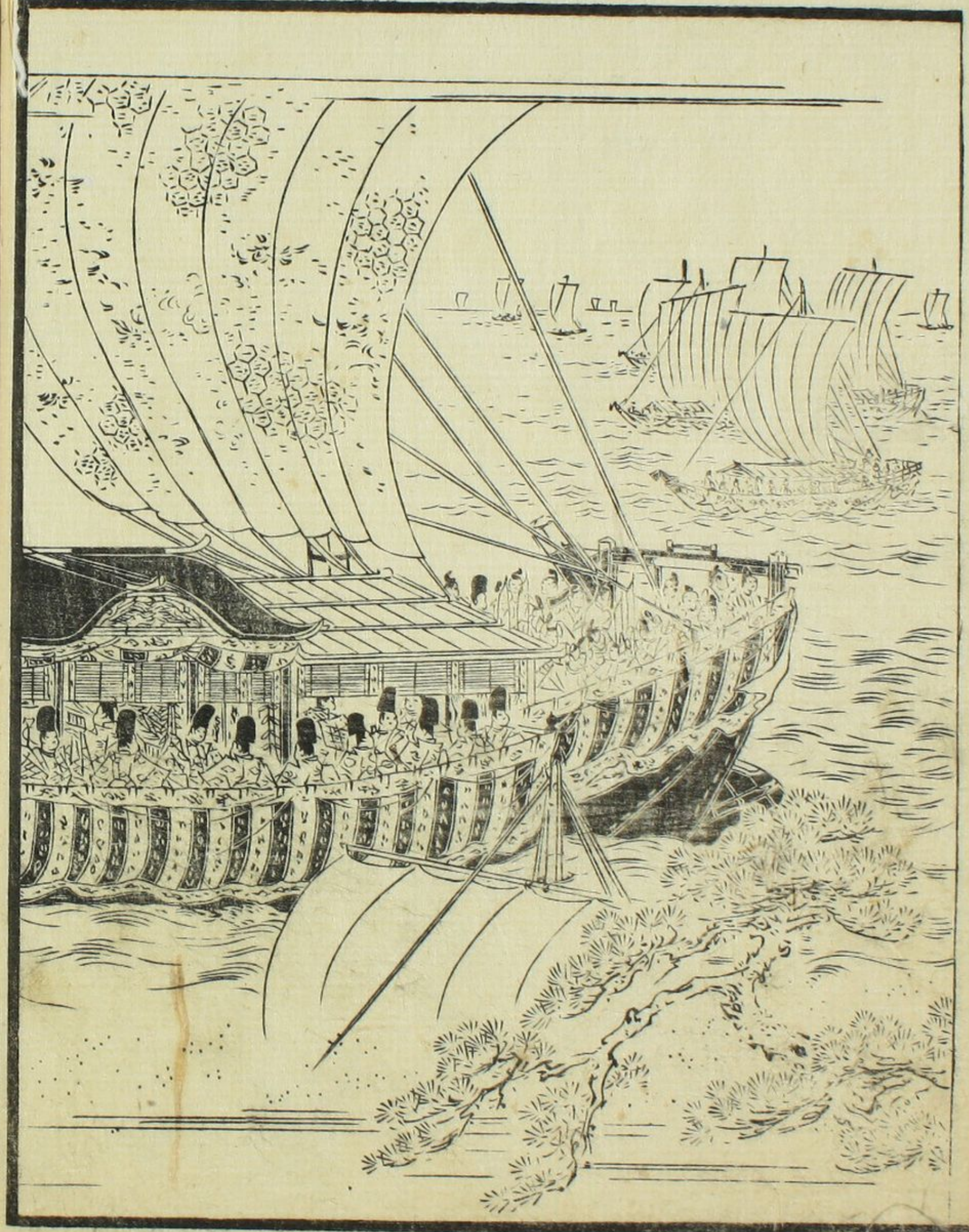
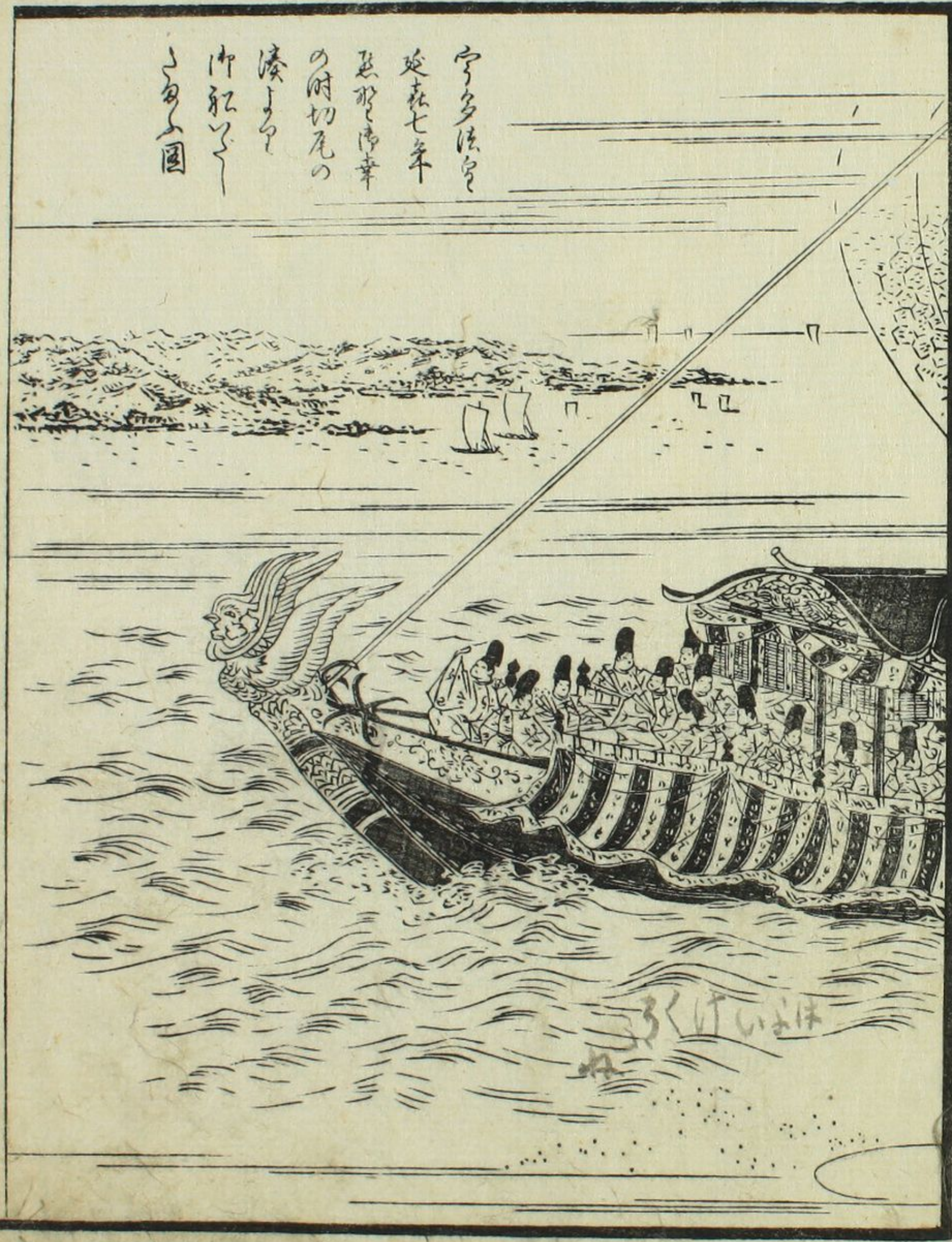
後鳥羽院御製

下志記也尤可

奇歌者乎

竹濠子御判

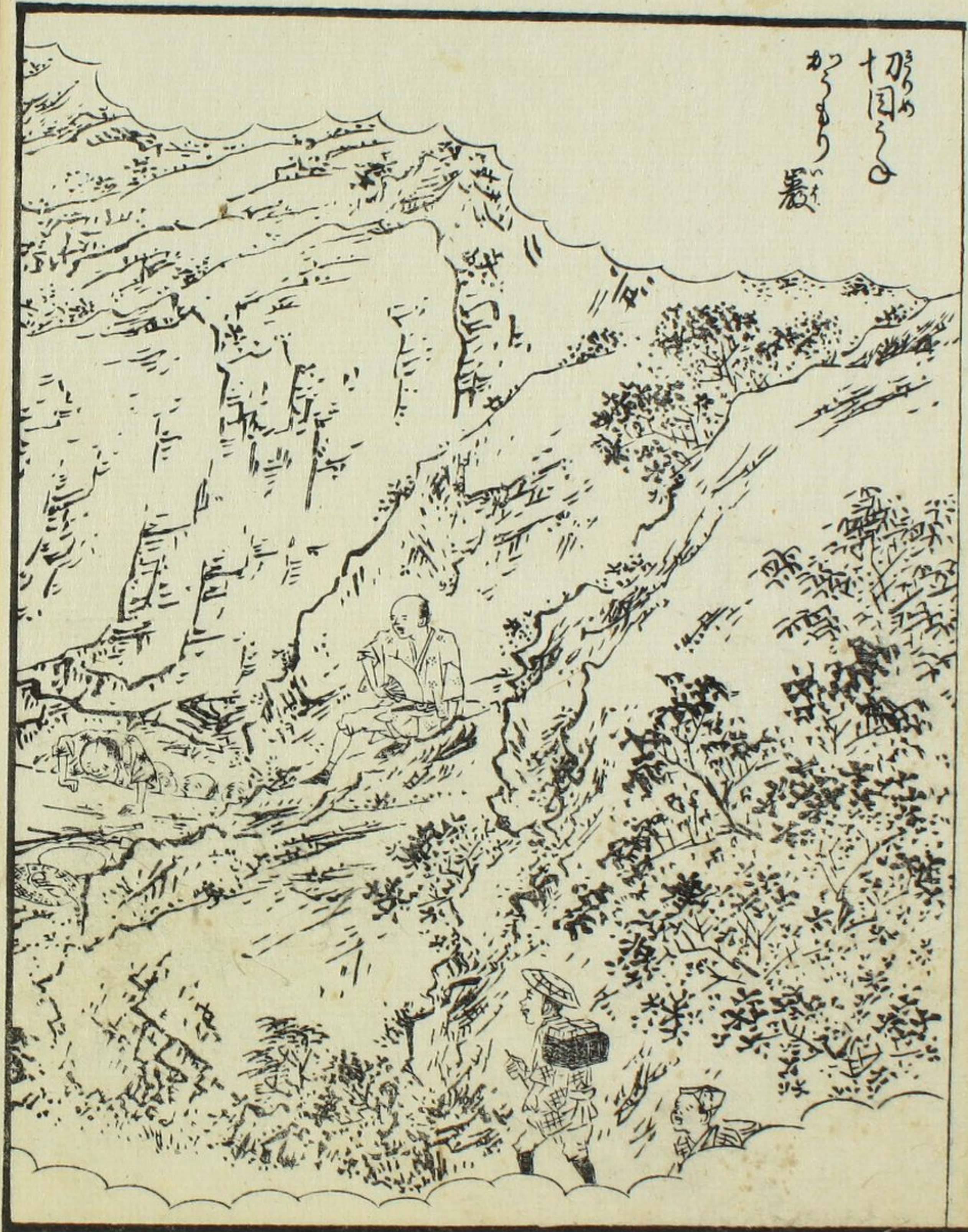
宇多法皇
延和七年
長門津幸
の御切尾の
湊より
舟船
のりて







岩穴の口ニ三分と修して
 是が岩のやうに下りあり
 ありたる一巨巖を昇
 りて上りて巖の口ニ此
 巖の口一物もなき巖の口
 小室つとて岩の口ニ此
 岩の口つとて岩の口ニ此
 岩の口つとて岩の口ニ此
 岩の口つとて岩の口ニ此



十国
 かき
 巖

社、欽、鏡、掛、又、川、久



岩首寫生



色ハ藍緑の如くふとて輕嫩
尤も此の漢名を苦苣と

つとて

四十四

○中山

殺目山往及道之朝霞髮髮谷八妹爾不相年

○中山王子祠

岩代村東面二村と云ふ古蹟と云代と云ふ

○岩代莊

岩代村東面二村と云ふ古蹟と云代と云ふ

君之齒母吾代毛所知哉盤代乃園之草根乎去來結手名

吾勢子波借廬作良須草無者小松下乃草乎荊核

式子内親王

前大納言基良

雅有

盤白乃濱松之枝乎引結真幸有者亦還見武

有馬皇子有傷結松枝一歌

松

松

松

後戻しと
 しの〜と松の
 こゝろさへ
 じよ〜とさつ
 老や〜ねらひ
 瀬見善降
 忠代の巻中の
 今うとあれ
 え〜とあひ
 ねと神
 さ〜い母
 そ〜と
 加納文廣



い〜ちの
 岩代
 い〜ちの
 結松



□ 盤代乃岸之松枝將結人者長忌寸意吉麻呂見結松咽歌二首反而獲將見鴨

□ 盤代乃野中山上臣余立有結松情毛不解古所念

□ 鳥翔成有我欲比管見良目大宝元年辛丑幸于紀伊國時見結松哥一首社不知松者知良武

□ 後將見跡君之結有盤代乃子松之宇禮乎又將見香聞新勅撰集

□ 幸とて又多みけ松山家集也乃松前大政大臣

□ 岩代の松風さけりもれあふ人も心むむとわれを西行法師

□ 岩代の松吹風おけり兼いんもどくぬ妻や頓阿法師

□ 歌昭云いささか紀伊小石代袖中抄の石代と云ふの石代と云ふは

孝徳天皇齋明天皇の皇子小石代と云ふは後醍醐天皇の皇子と申す

皇代齋明天皇の皇子小石代と云ふは後醍醐天皇の皇子と申す

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

之名抄云近來人ハ石代と云ふの石代と云ふは

人の墓也結松と云ふは松の枝を結むと云ふは

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

松を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは松の枝を結むと云ふは

呉りれども 孫ぶきこり 同よりまぶし 終る何ふあもも何
あぶき 城松も 孫ねも 地あて 孫びらへ 孫ら 故に 孫ら
けく 孫ら 其傳 孫ら 孫ら 孫中抄 孫ら 孫ら 孫ら
あつて 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら
孫代と 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら
とて 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら

巖城結松

那波道圓

別離雖惜事皆空 縮柳結松情自同 馬上哦詩猶予古

寥々一樹立秋風

家集

岩代の松 風ふき 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら

令綱

年浪草

岩代の松 風ふき 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら

似雲

岩代山

夫木抄

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら

平忠度朝臣

岩代尾上

紀四編六六六

後拾遺集

堀川百首

明日井集

萬葉集

庵主

新後撰集

新編古今集

口

和集

家集

夫木抄

岩代の尾上 風ふき 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 前太宰帥資仲

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 仲實

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 雅經

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 増基法師

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 大藏卿隆輔

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 參議雅經

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 從三位範宗

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 後鳥羽院

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 守覺法親王

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 爲家

孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 孫ら 須徳院御製

○岩代系

新撰六帖

○岩代王子祠

西岩代村に殿して磐城古及浪速水河等所幸記の文より此の磐代王子祠の側より所小食所所りて其不より千里此後をこて千里王子社

みく内系とつ小山河等所幸記の文より此の磐代王子祠の側より所小食所所りて其不より千里此後をこて千里王子社

十二日略次出濱參盤代王子此所為御小養御所無入御此

拜殿板每度被注御幸人數先例云右中身召番匠板放天力

ン十ヲカク書入數天如元令打付之建仁元年十月十二日

由以左中身申入即可被聽上北面之中書着無術之

御幸四度

御先達權大僧都法印和尚位覺實

御導師權大僧都法印和尚位公胤

内大臣正二位兼行右近衛大將皇太弟傳源朝臣通親

紀四編六飛七

次々如此殿上人上北面僧寛快已下三人下北面皆書之此

十四日略次經浦路參岩代王子面々注一首愚作云

眼疲蒼海千里望響潔綠松數曲調

新古今集

玉葉集

新統吉集

平家物語

元暦元年平惟盛能登落小藤代の王子と和氣種成朝臣
王子と和氣種成朝臣
子此後より小て持統天皇
とて小からりてとて小からりて

岩代

て後越さんんもひけらぶ近づくけ続どもりやまら
てるるまもはくすいそま馬よるもあは海りくす
てよりけりもくすいそま物小そ後あらんしりやま
ていそまやもりもくすいそまは當小の臣人湯浅権守
が子小湯浅七并を湯宗光とつよもれるり云
長門奉大目小長
多れが群代

岩代

後古今集 岩代をすさくせのほまもみけり
岩代のすさくせのほまもみけり
前中納言實實

岩代の渡ね枝の森の若葉さくはむさびりけり
喜多院道直親王

日 法橋顯昭

耕去千有 明魏

岩代の渡ね枝の森の若葉さくはむさびりけり
頓阿
按こころ小万葉集一巻幸于紀伊國特川島皇子御作歌
之枝乃手向草とつよあつと初句ハ白浪のよける渡とつよ
歌こころあま後ねを破り地
の跡ねをよめるりけり

岩代

萬代集 中院入道右大臣

岩代の子多なるはびねのそくもなるもあもるも
後九條内大臣

岩代

夫木抄 鴨長明

岩代のむねのけりもあもるもあもるも
祐止

岩代

伊見草子 祐止

八幡宮

岩代村小内村の表上汁有り奈礼八月十日自授有り元龜二
橋れも所地代右馬太美宗光倫や

南歌

岩代名の表上汁有り
二十八ヶ村を踏

序倉

序倉大相より 序倉あり

山内

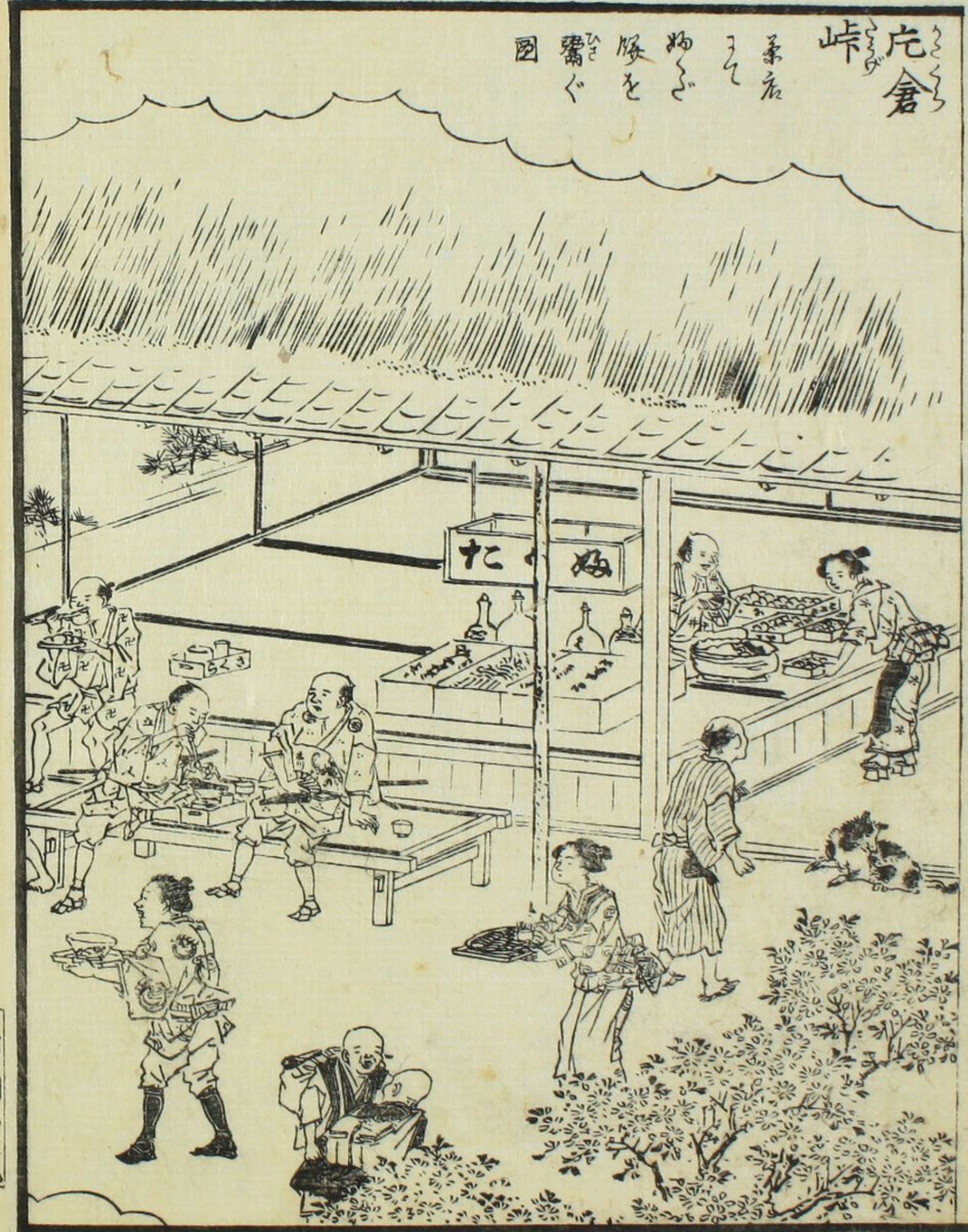
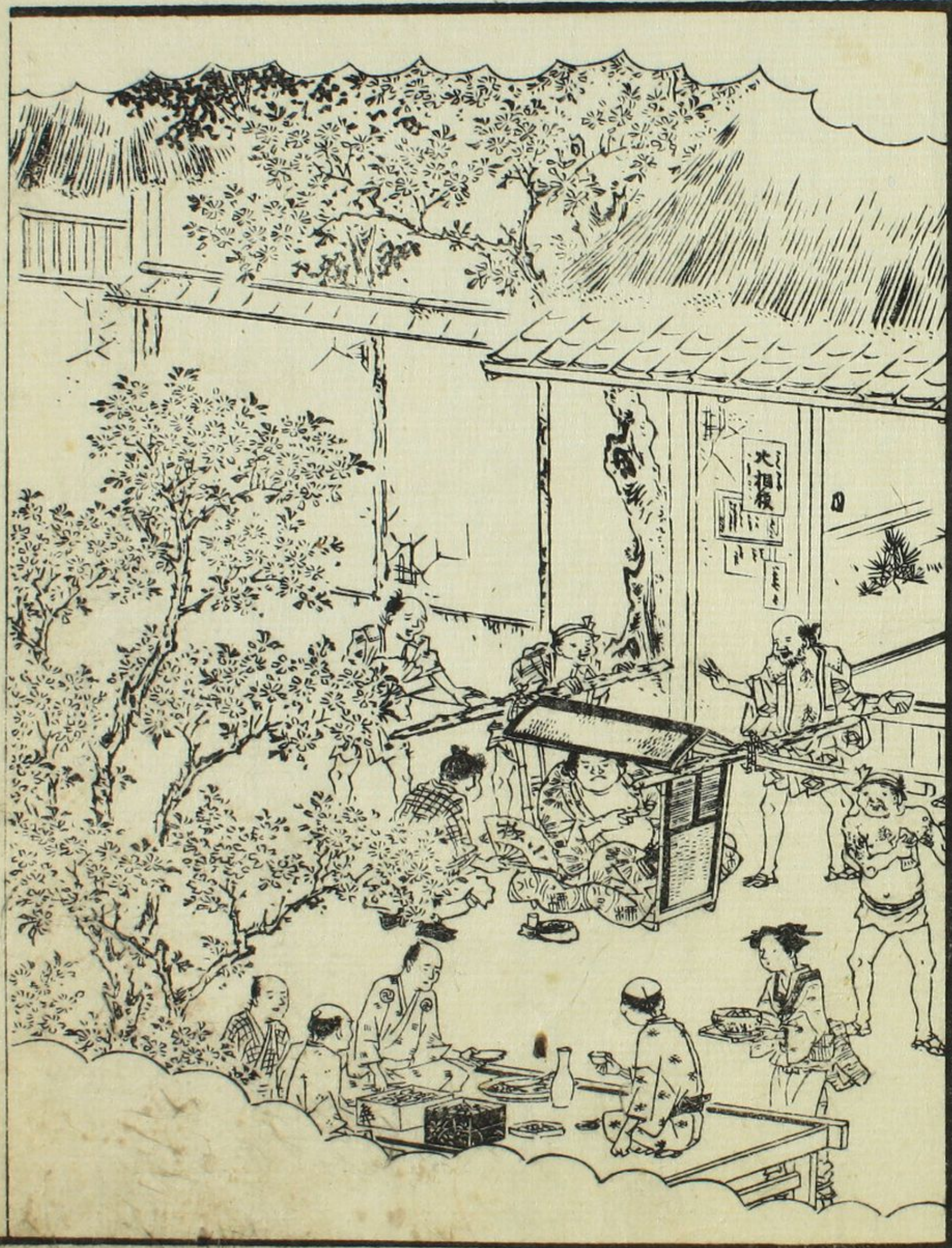
山内村に歌の
同小原をくすりし若葉と起小男女蘇杉はあて我て男
女之候とて

山内

山内村に歌の
あまもれをくすりし若葉と起小男女蘇杉はあて我て男
女之候とて

山内

山内村に歌の
あまもれをくすりし若葉と起小男女蘇杉はあて我て男
女之候とて



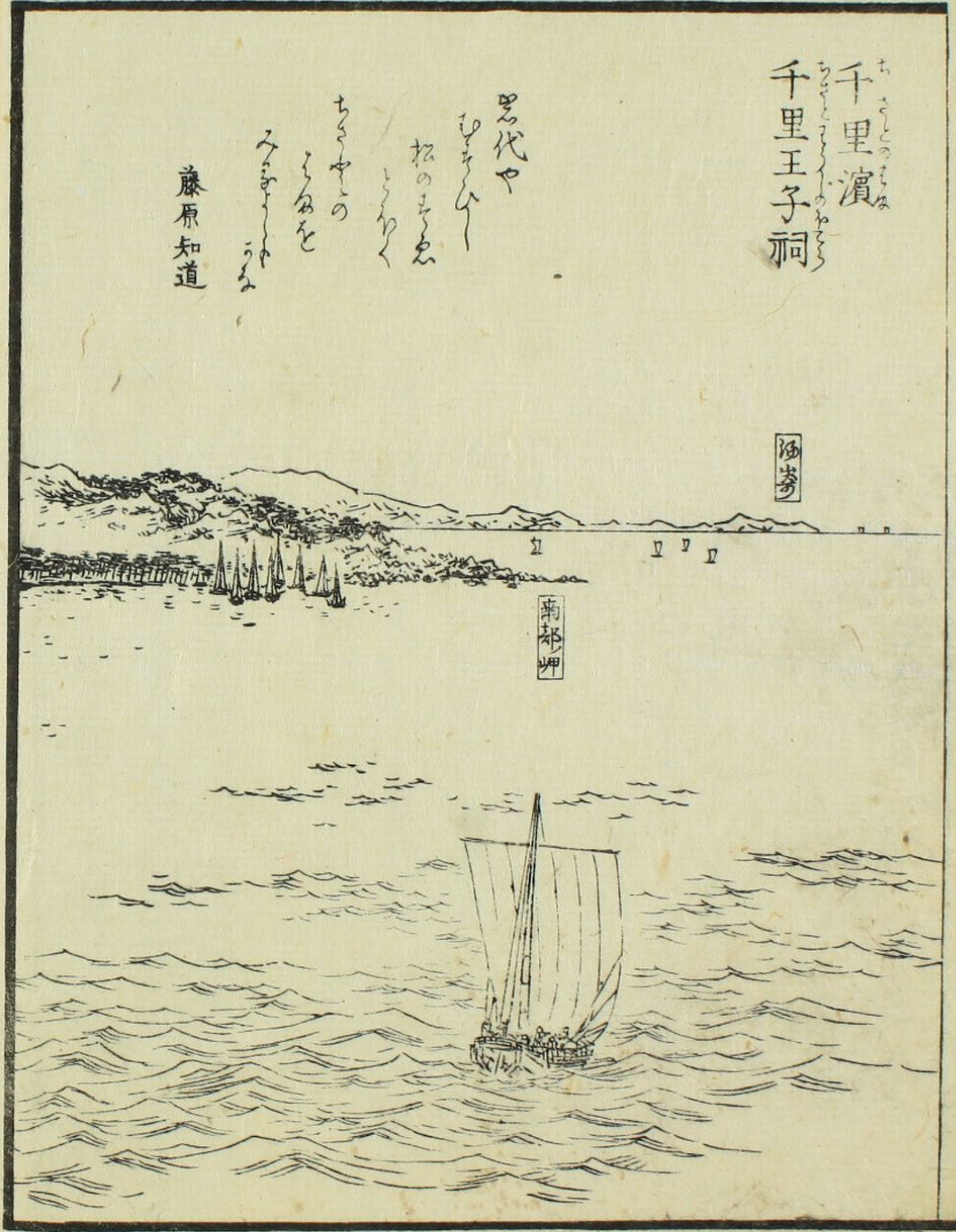
峠 片倉
茶店
物々
賑々
賑々

千里濱
千里王子祠

思代や
ひきひ
松のまゝ
ちやの
くまを
ふき
藤原知道

海舟

南都岬

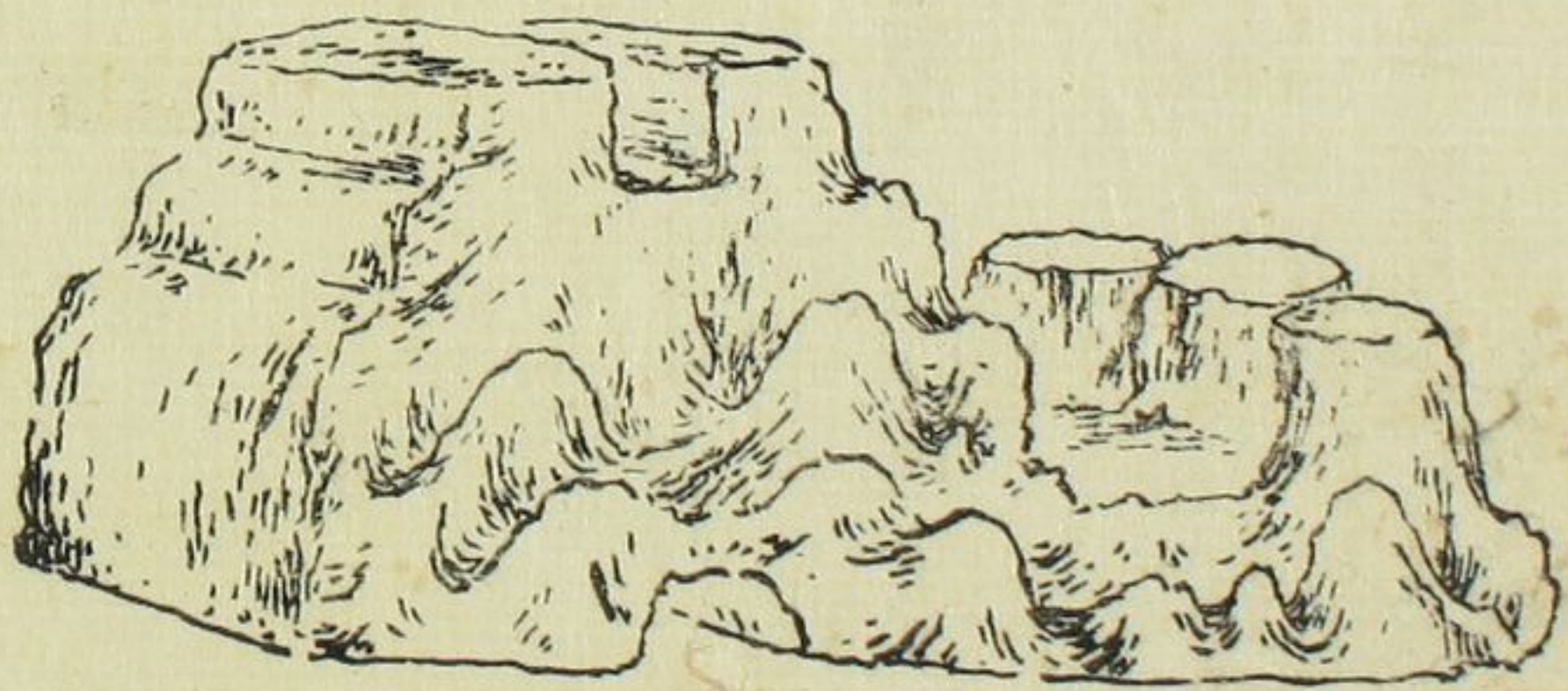


松葉の
おまけ
水崎久道



安藝國福王寺藏

千里濱名石圖



右

秋の月影の淡風あざむる清波の秋乃小幸

夕陽斜影雖甚薄夜月清輝難當暈

本年記云

元弘元年七月三日大地震のついで紀伊國千里濱に千倍
係小陸地とせざる二十余町

因つて平家物語長門本統が鴻の條小つと濱に
つづれあつ千里に濱あひ出らして山川谷河を流るあ
急業は人のつ言れ飛去やう消ゆれもれとたの
くごあひける

千里王子祠

千里濱小つと石は中継子一対三具を築る寺と神寺

御幸記云

自是又先陣過千里濱

此處一

参千里王子

産物珊瑚砂

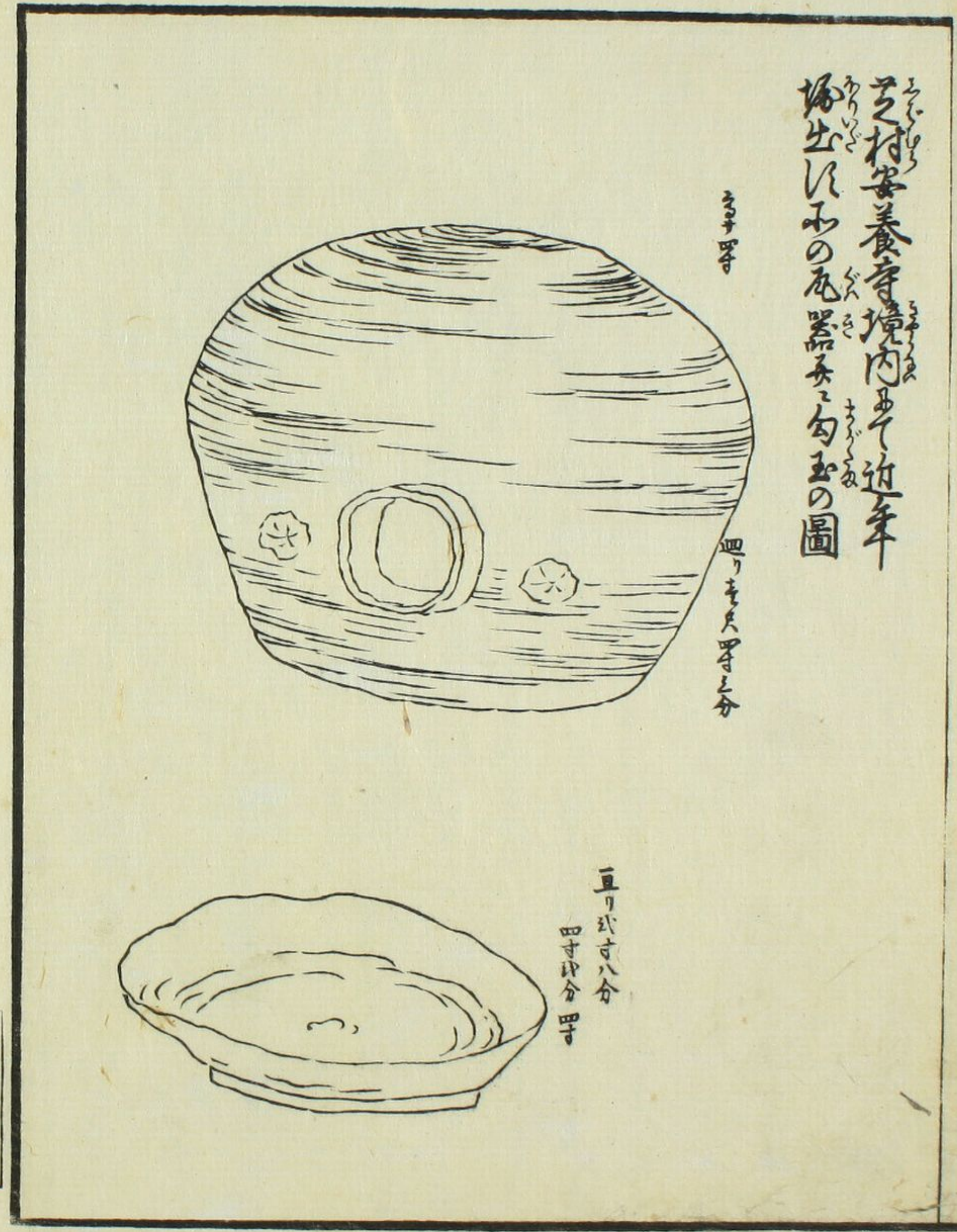
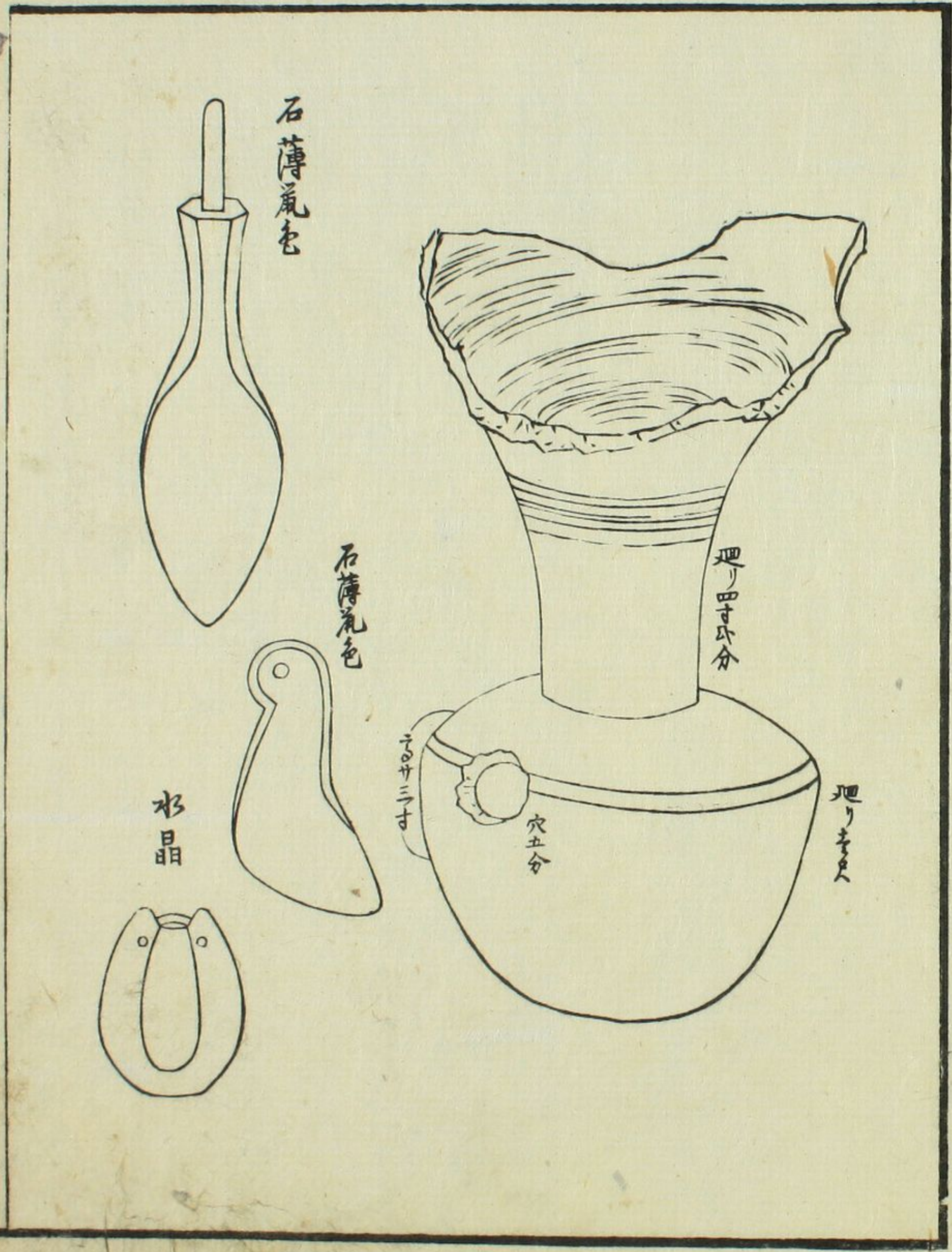
千里に濱くま珊瑚樹の

名石

石既傳して今安藝に傳ふとて藏して磯石といふと一は砂は
かの寺くま玉とて其石の形はふと事れ多と傳ふは事と載

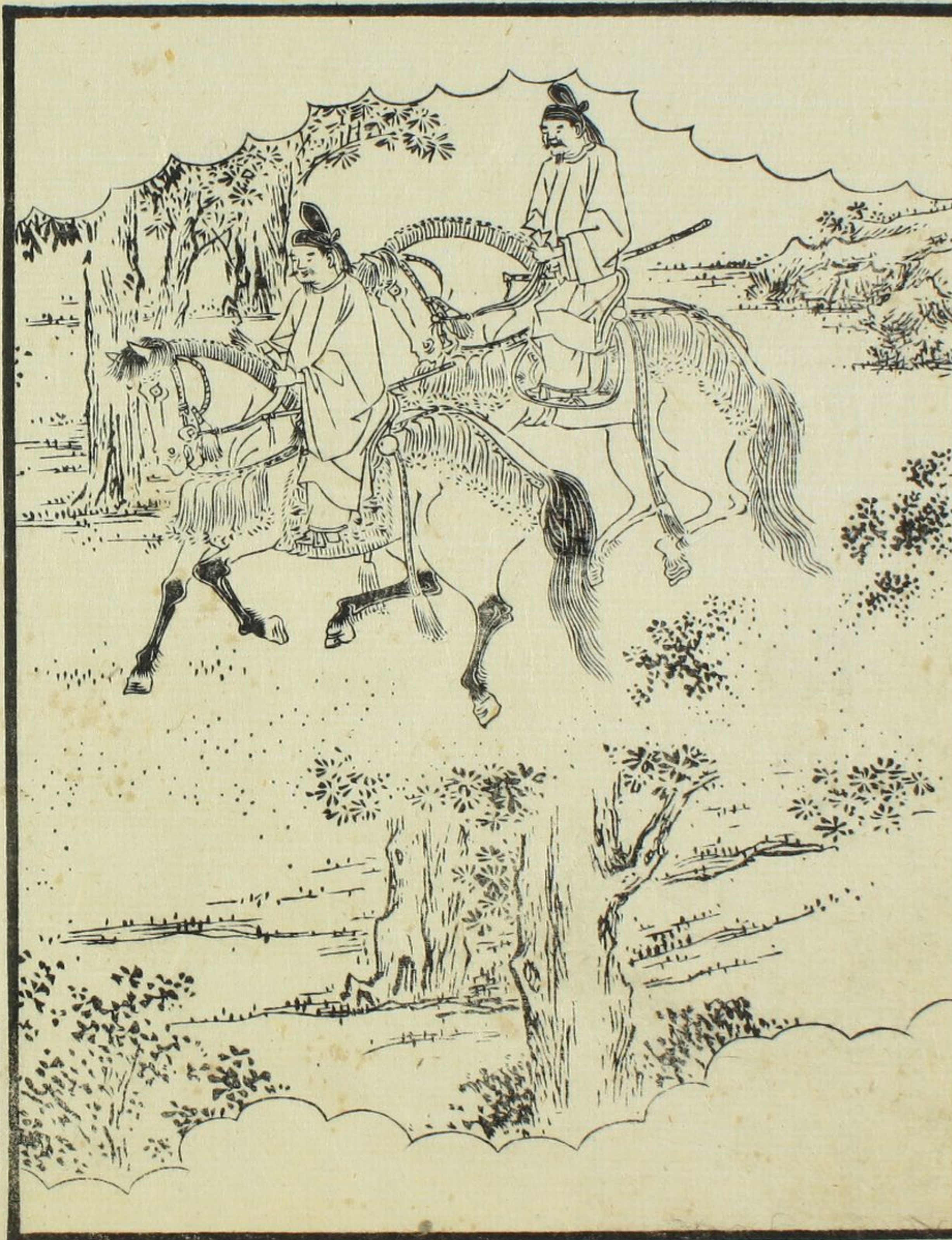
千里濱名石





芝村安養寺境内にて近年
 堀出所の瓦器等之白土の圖
 三寸厚
 廻り五尺一寸五分

今昔物語
故事の圖



く夜明けぬ道とい事と抱く怪しき思ふに樹れ本と也
 了る小物も無し只道徳神の飛と造るるも其飛
 走く極て多れと終るるとも男れ飛のこもる
 女れ飛の元一前と板と書くる強馬もその破れも
 たつ道と此を見く抱るはは及徳の云ける也けり
 ありと強よ奇異小も其強馬れその力の破れを
 系と以て強て本れかく至つ道といふも今板吉く見
 んとあり其目も高樹の本もさて板吉計り板あり
 やく多れ馬もあれる人來ぬ道徳も亦馬も笑て出て去
 るゆぬ嘘も然る終り道徳ぬぬとすく終り本吉く
 子弱來もつ終人と不知道と小向て抱く云く聖人の
 眼白れ駭の足次療治一終るる依て病けのこす誠初
 りつ此れ恩難報一終るるは樹の下れ道徳此也此乃

多れ馬も終る人への夜神小を次ふれ内誠也時
 一長次翁と以て前役と次若一不者奉來か言と以てお
 ちとて以て罵る此の言實小難堪一終るる今此の下劣の
 神飛と弃て速く上品此功德れ身と得んとす其を聖人
 此神カ小可極る一と道公言と云く宣ふ妙也と云へども
 此れ家力も不及と道徳亦云く聖人の樹下今二日而て
 法花經河浦一終るるとすうは法花の力も依て忽と
 若れ身と弃て樂れふとすむと云て撞消つ極く失ひるも
 道徳の云小極る二日之板其のふと終るると云へは法花
 強次補次身四小并來れ只道と云れして云く家れ聖
 人の慈悲は依て今此の身と弃て去き身と得んとは
 以沿補陀落ふと生て親善れ眷屬と成て并れ終り界らむ
 此も悔も法花をすすむる也聖人若一其の虛實と知む

し思ひたゞる事本れ枝と似る小き事本れ花を造て起る本
 像と等しく海に上り浮て其依法可具結しと云て捨つ
 極く失ぬ其法道と道徳のそふ強く忽ち花を造て此の道
 徳の像状をせし海邊にゆく此を海に上り放つはよ
 其時風不立波不動し一葉紅菊と括して是を又
 道と此紙入る葉紅菊の不見成るもはなれおして返ぬ
 又其の御しと老るる人より其の人れ多し此樹の本れ花
 并れ形とて光と放て照し輝て音響と發して南と括
 てはふれぬと入けて道と此のそと海に流して幸も
 忍く強よ法花神と通るも不忌と道とが決るとして人皆
 幸ひけりといひん流るはくはれと也

招世寺 名村より海に宗西の山頂を去りて多し以御才及
 代名年集於四辺庄宮小末も多し海令も備はれり
 一宮権現社 東市庄村より西市庄村に御聖宮と名法せされ社
 一の宮の表土林ありしといふ文の山上林の林れり

祇園御靈宮

西市庄村小川の末中十ふ村の表
 土林ありて境内ありと名はれり

當社々系於此御聖宮より知法せりといひ傳へ

御聖宮といひ御聖林とも知法せりといふ御聖宮より
 御聖宮といひ御聖林とも知法せりといふ御聖宮より

下向せし体もと御聖といひ傳へ今も礎遺りて其ふ

めく紫式部は法事といふといふ又明應四年に棟札を

始とて文安永正永禄等れ再興に棟札を河内と存

り

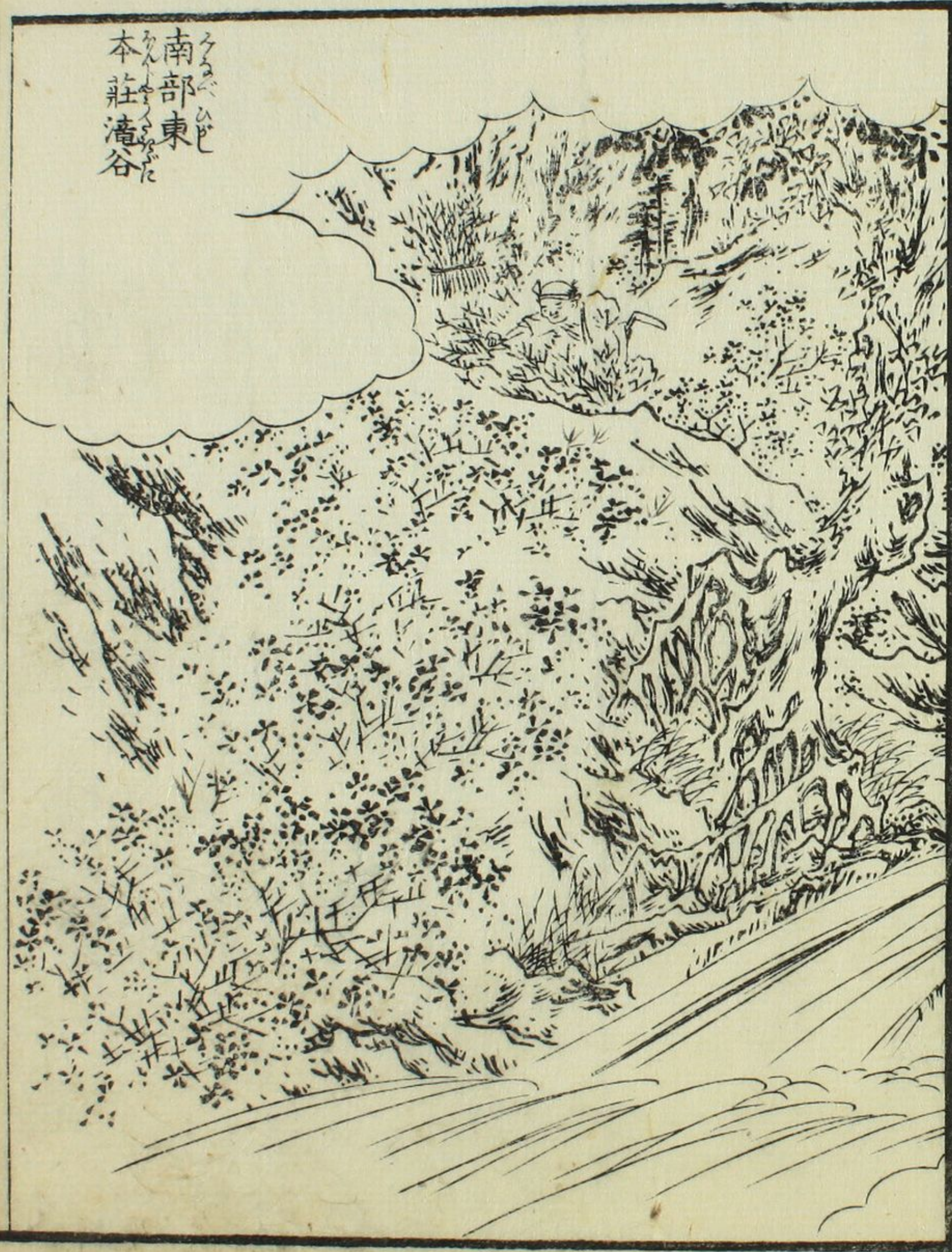
領主愛洲兵部大輔源祐俊 西公友 阿闍梨善祐
 推薦都後君

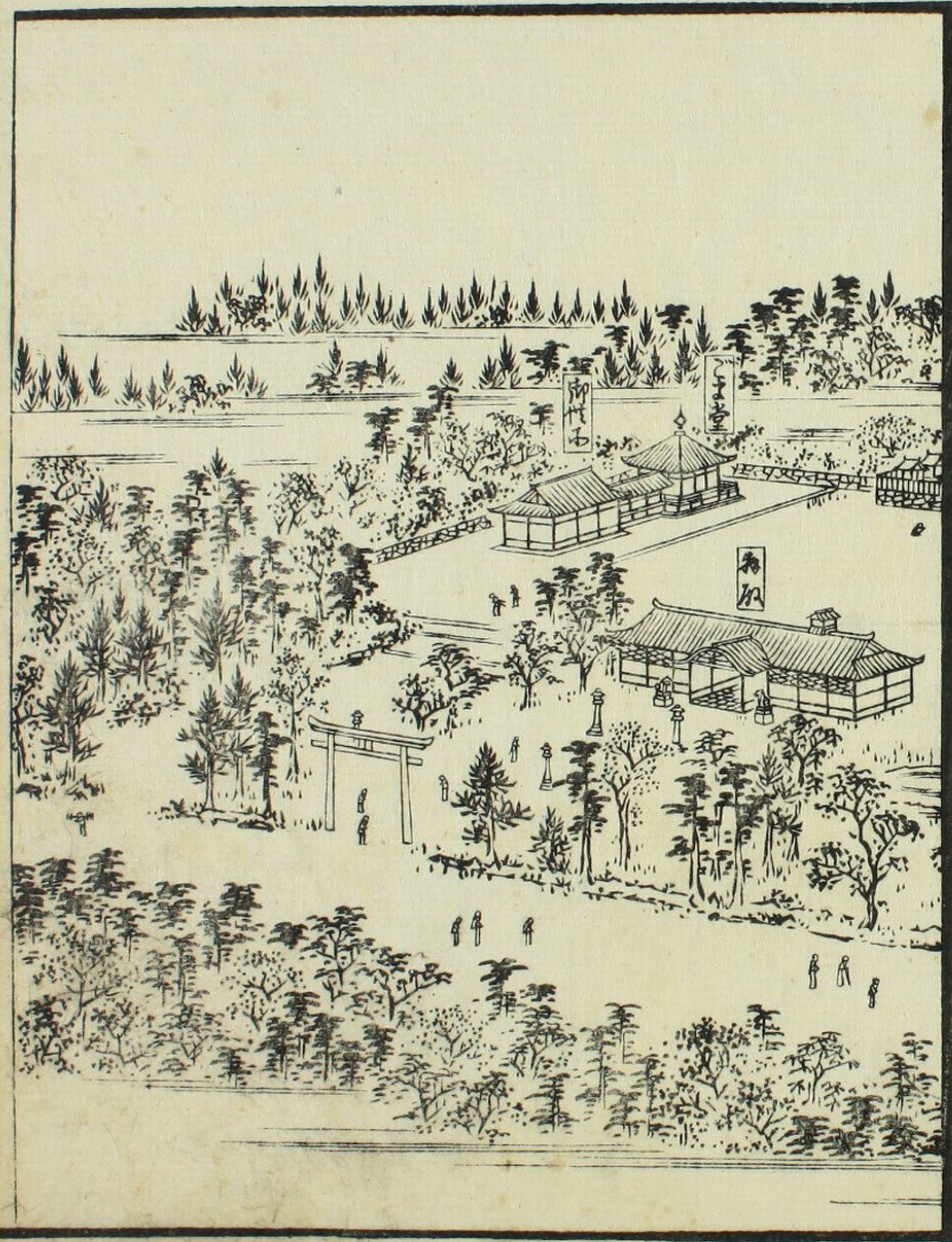
造采 南部御庄祇園御靈宮二神社 明德三年 上月廿日

勸進僧東獨門葉長貞上座 貞永 三郎 大友

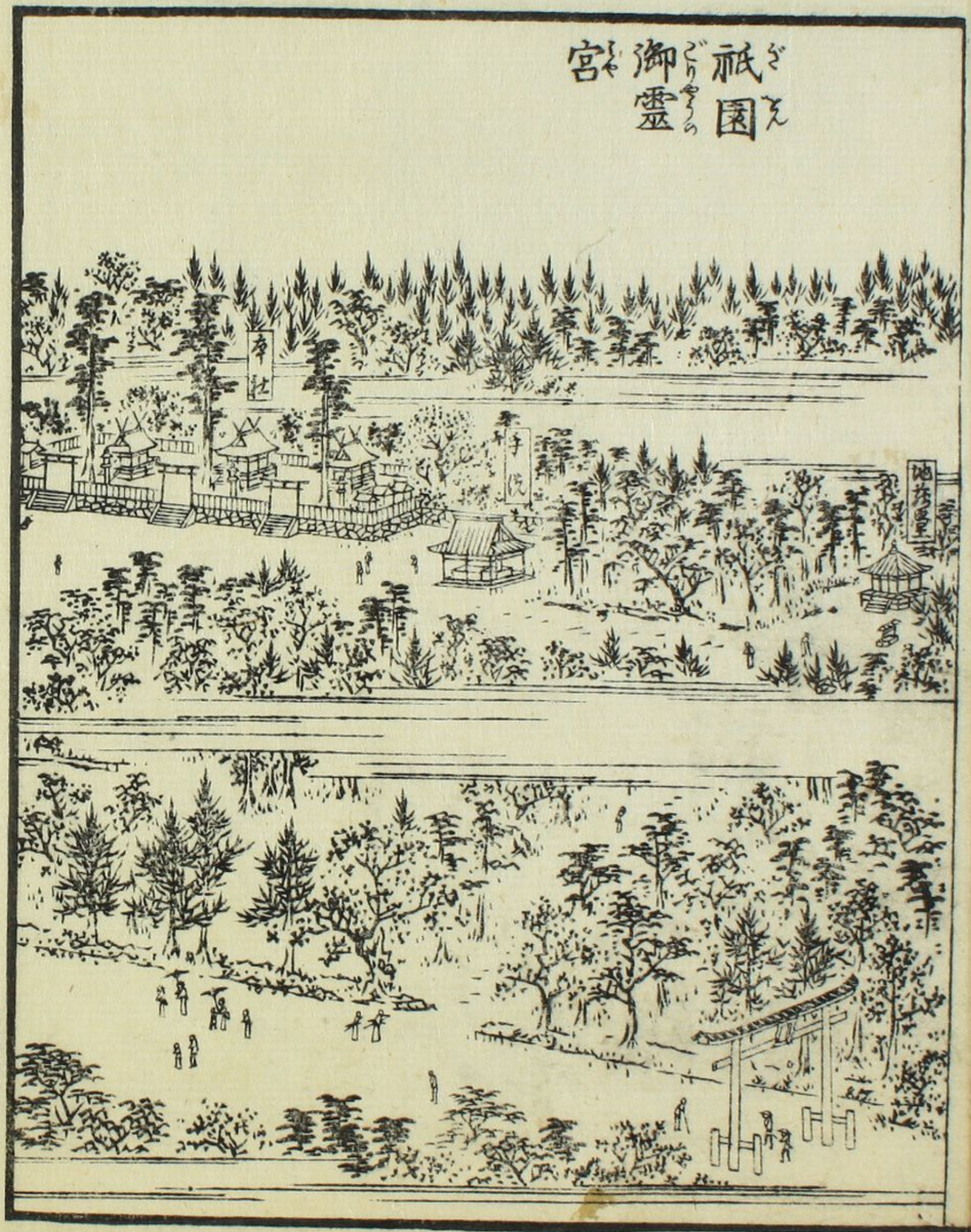
野邊氏城海

西市庄村小川の末中十ふ村の表
 土林ありて境内ありと名はれり





宮御祇
靈園



紀四編六五十一



瓜溪 此溪小也... 懐... 瓜溪... 産物... 漢琴山房詩

南新川 南新川... 漢琴山房詩... 垣内保定... 南新川... 又寸れ多地...

南新川 上流... 南新川... 南新川... 南新川...

南新川... 其... 競考... 南新川... 南新川... 南新川...

河和惣大の神社 同村... 河和惣大の神社... 河和惣大の神社...

天宮の神社 名之内村... 天宮の神社... 天宮の神社...

植田梅林 名之内村... 植田梅林... 植田梅林...

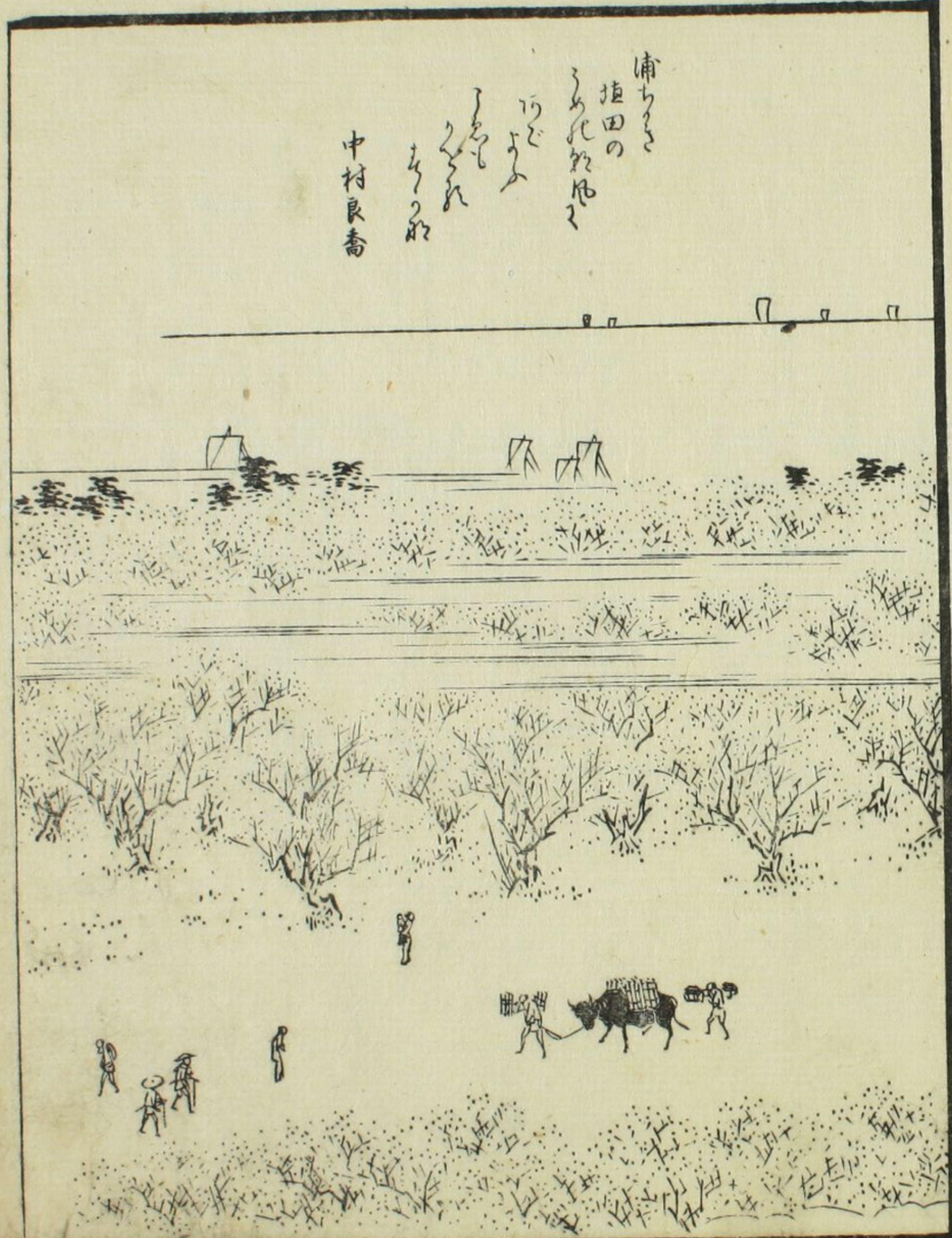
朝々 振衣浴蘭... 夜冷 獨捲皓霞... 又踏 橫斜月明... 蕭聲 不下飛天...

埴田の梅林

いびき
よれぬ
の
あつた
さだ
西田三子磨



浦
埴田の
よれぬ
あつた
さだ
中村良喬



鹿島

来慶歳寒孤心存霏々瑤屑滅衣落已醉仙漿萬斛樽
芳縁不盡互披襟甫信人間白衣尊便願百年酒醒日
俱朝王皇上崑崙為斟一杯竊相祝枝間青鳥矢勿讓
埴田村の坤海上八町三丁にありて奇蹟異くして巖上には松樹蒼蒼として
の葉をなすの社の社に人あらず一毎に八月の頃泊るともれまゝに
侍れぬの安んず

萬葉集

大宝元年辛丑冬十月大上天皇幸紀伊國時哥十三首中

三名部乃浦塩莫満鹿島在釣為海人乎見變来六

此哥れを依按するは程古の干物に於てありて
往來せしむるも今も羽根崎よりとて道し

拾玉集

潮い事人の心も此浦とつ浪のよるこそみづりされ 慈圓

産物海馬

此四の浦小多一妊婦はと愛み振
アと産く膝めば妻を以てつ

鹿島の神社

此れ中二丁にありて神社と名づるは
と曰く武甕槌命ありとて

重賢記云

室永四年十月四日午に時さぐり波濤はらびて山も崩れ
地とさけ家居もくろくぐらうとあまがく震動して人み
ふ軒とけーらてささささけるく忽ち波よせきつて山

内村由利川の石小巻 此家始ちとくをるうれをそり老若男女はわ

りさぬ然足くしらね忍一海面よりう浪こそたち来りこ
と遊上適よと多く小をぬささけびてとるもれもくしら
次山是小とてこれありけれはあもあて人みあてとて
成室をい紙も折捨て折れ止へて是よりあされいかりて若
れ道小若れ枕之板田板をかまおさゆ一ぬあさるやうど
いも人も交りさるれど何よりは方へを浪も来り次民
あもいりやまのりさるるこ一と折らりうくもあてゆり
あれ彼山小いりて一かと或人れ流をけるわこてよる
をう海面紙足後一ゆを一と小麻傳れ沖よると彼渚
山をふつとつまもいげたらんうされ波を来くる中
く白くあみして妙に光るける物れ足くけはばりや
一と目をさるれと次とえうう足志をううがふと足ける

今より鹿島神社
南部鹿島神社

いづれ此方

うしぬく磯

しづみの

あつち

いづれ

なつこ

り

然代繁里



紀四編六五上

鹿島社

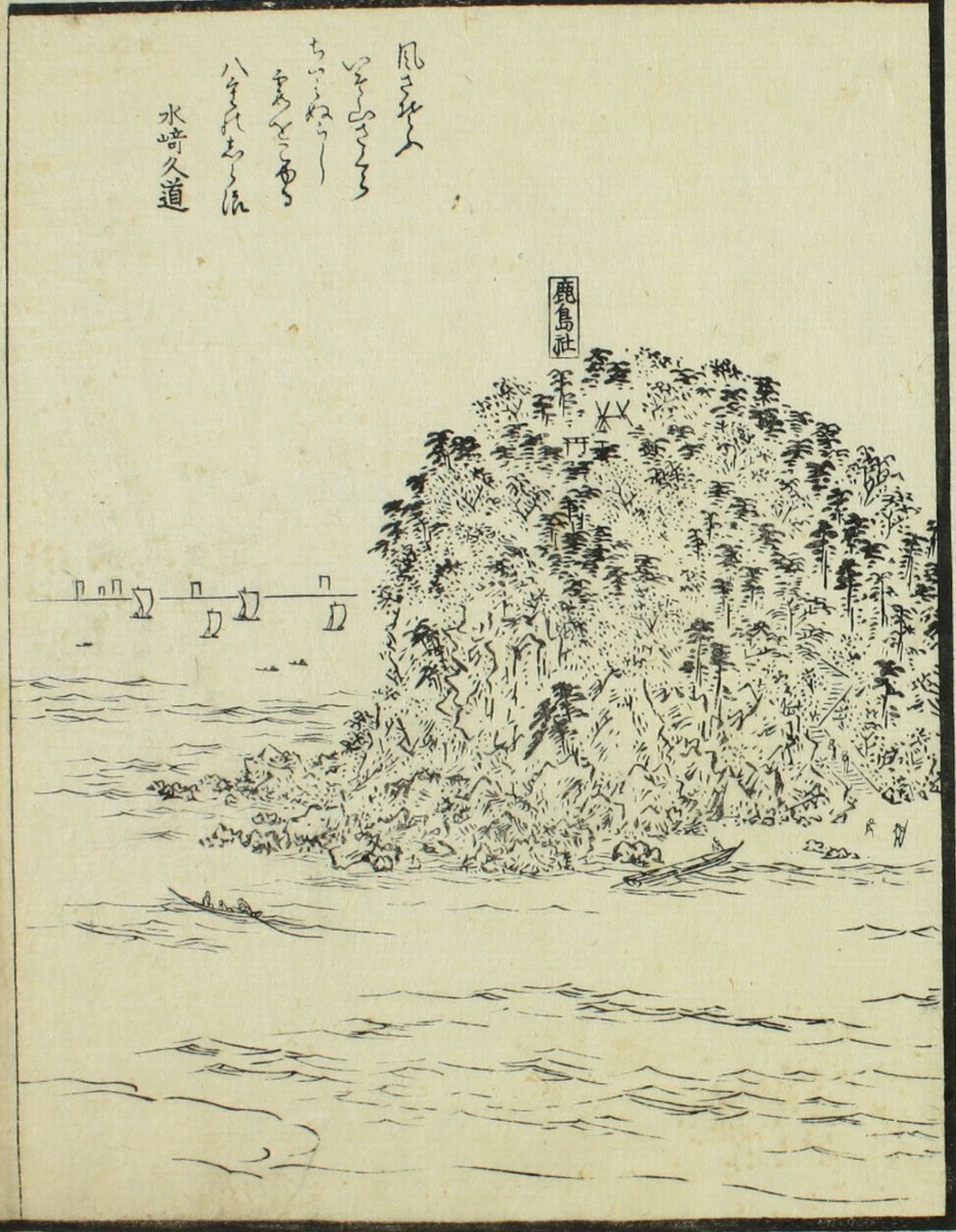
風

ちい

八

水

崎



小其波沖みして大小二つ小より大なるを来れり
 仍小きれば浦へ寄来り彼よりくる小志て先にもれ
 大なる波れ中よりくるもつとせ仍りも若きれ沖
 ころりとかかりもよるも其波をたねきて麻徳乃
 沖より花くへるぬいぬいもかきしりれりける事
 めやとこぬやうくくくくくくくくくくくくくくく
 小して物録ふ小なりぬべし扱ふは彼山内村乃
 に志くこと里めは波も来らざるもと野宝永み子
 歳六月吉日重賢辛丑麻徳
社より書む

紀伊名所圖會後編卷之六終

紀四編八五七

嘉永四年辛亥四月發兌



柿園加納諸平 全撰
 霍野神野易興
 琴泉小野廣隆 畫圖

紀伊名所圖會後編近刻

牟婁郡之部

發行書林

江戸須原屋茂兵衛

大坂河内屋喜兵衛

同河内屋太助

紀伊書肆

帶屋伊兵衛梓

紀四編六末

トヌコメ

